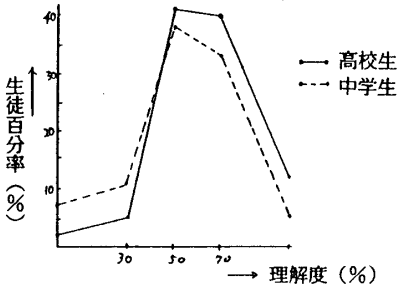
めであろうと思われる。授業の雰囲気に悪影響を及ぼしていると自覚している４％ほどの者（②のキ）に対し，騒がしさを自ら作り上げている原因を記述式で質問してみたところ，次の様な意見のものが見られた。

- 学習内容が教科書通りであり，その時間に学習する意味が感じられない。また，あまり静かだと眠くなり多少騒がしい方が頭に中味が入りやすい。
- 先生が授業に遅れ，けじめのない時や生徒自身がやる気を失っている時に騒ぎやすい。
- 自分の自覚が足りず，皆につられて騒わいでしまう
- 学習内容が理解できないので騒わいでしまう

中学から高校に進むにつれ授業内容の理解度が低下し，理解できない者の割合が増えている（③のエ，オ，カ）が，これは，選択性をとっているものの，授業内容が中学に比べ高校になると高度化し，また学力差が大きくなる為であろう。中学と高校における理解度の相異を下にグラフ化した。



勉強の取り組みが消極的であり，授業の雰囲気が騒がしいと感じとっている生徒が約半数もいる現状では，如何にしたら授業に対し積極的に，意欲的に取り組ませることができるか，我々教師の今後の大きな研究課題となるであろう。

〔3〕遅刻・早退・欠課について

原　幸宏　米田閏一

時間の観念とそれを守る自覚と実行は，秩序と規律ある集団生活を維持するための基本的な要件の一つである。日常生活が多様化する中で，中・高校生の生活リズムは，個性化の傾向を強めており，家族間においては同一・同調性が稀薄になっている傾向もあろう。このような現代的な体様に生きる中・高校生には，自力で自己の生活リズムを維持し，安定させるためのチェックアンドバランスが必要となってくる。中・高校生の生活の乱れに起因し，これを促進させる要素は，家庭・学校・一般社会を問わず，生活そのものに内在しているため，学校における生活指導が従来にも増して容易でなく，単なる対処的指導法では解決の糸口が見出せない困難さがあり，個別指導の重要性を認識しなければならない。

そこで，適切な生徒指導を確立するための手順として，生徒の生活面を時間との関係からその実態を把握することとし，生徒自身の判断・評価に委ねるアンケート方式を採用した。

1. 実施日：昭和61年２月15日
2. 対象者：中学１・２年（各学年２学級．計４学級）
   高校１・２年（各学年３学級．計６学級）
3. 調査事項：１年間における欠席・遅刻・早退・欠課の有無と理由，および定時刻の守られない理由，守るための心がけ
4. 結果：以下の表１～４に従ってコメントを加える。

表1．　１年間に「欠席」した生徒数とその理由

単位：％

学年・性別			欠席した生徒		理由			
					けが・病気	家庭の都合	怠け心	その他
中学	1	男	57.1	61.9	96.0	0	0	4.0
		女	66.6		88.8	11.2	0	0
	2	男	73.3	64.7	80.0	20.0	0	0
		女	55.8		100.0	0	0	0
高校	1	男	65.4	70.0	91.6	8.4	0	0
		女	74.1		93.4	6.6	0	0
	2	男	63.1	73.1	65.9	10.6	6.3	17.2
		女	81.8		74.1	17.9	8.0	0

表１に関連して要約すれば，次のような特徴が指摘できる。

① 欠席率が高く，学年進行に応じて上昇傾向を示す。
② １人当たりの欠席日数は，どの学年も「５日以内」が最も多い。
③ 欠席理由の大部分は，「けが・病気」である。
なお，「家庭の都合」で欠席した者の中には，

表2　1年間に「遅刻」した生徒数とその理由

単位：%

学年・性別			遅刻した生徒		理由				
					けが・病気・通院	家庭の都合	交通機関	怠け心	その他
中学	1	男	52.3	50.5	14.8	3.7	18.5	25.9	37.1
		女	48.8		16.6	0	20.8	29.3	33.3
	2	男	80.0	78.0	22.2	9.2	37.0	29.8	1.8
		女	75.0		47.0	0	29.4	17.8	5.8
高校	1	男	73.3	77.8	20.6	4.7	19.3	39.6	15.8
		女	82.2		28.0	6.0	20.7	28.0	17.3
	2	男	83.0	86.7	27.6	2.6	22.3	40.7	6.5
		女	90.3		38.0	8.0	30.0	21.0	3.0

「忌引」を含む。高2の「怠け心」には，「寝ぼう」を含む。

高2男子の「その他」の一部には「停学」を含む。

次に，**表2**についてみると，

① 生徒の過半，学年によっては80%前後の生徒が遅刻を経験している。

② 遅刻の理由は様々であるが，「寝ぼう」を含む「怠け心」が，一部を除いて30〜40%におよんでいるのが目立つ。

③ 1人当たりの遅刻回数は，中学では「年3回以下」がほとんどであるのに対して，高校になると「年5回以下」が最も多く，「怠け心」による遅刻の割合が高く，累積も大きくなり，それが限定した生徒にみられ，問題は大きい。

表3についてみれば，特徴，問題点が次のように指摘できる。

① いずれの学年においても，男子より女子の方が早退経験者の割合が高い。

② 高学年ほど早退の割合が高く，高2においては過半の者が経験している。

③ 早退の理由は，「けが・病気・通院」によるものが，半分以上である。中1および高1・2の生徒で「自分の都合」を理由に早退しているのは問題である。また，「怠け心」による早退が高2男子で20%と突出しているのも大きな問題点である。

表4の欠課は，登校していながら，ある授業だけ出席できずに例えば，保健室で休養した場合である。この欠課についてみると，次のような特徴点がみられる。

① 高2以外は50%以下であるが，どの学年も女子が男子の割合よりも高い。

② 欠課の理由の大部分は，「けが・病気・気分がすぐれない」となっている。

③ 高1男子や高2男女にみられる「授業がつまらない」ための欠課は，教師側に問われる問題である。同時に，欠課時数が6〜10回にものぼる高1男子の特定生徒には指導上の配慮が必要と思われる。

表3　1年間に「早退」した生徒数とその理由

単位：%

学年・性別			早退した生徒		理由				
					けが・病気・通院	家庭の都合	自分の都合	怠け心	その他
中学	1	男	19.0	20.0	87.5	0	12.5	0	0
		女	21.1		57.1	28.6	14.3	0	0
	2	男	36.0	43.9	94.1	5.9	0	0	0
		女	56.2		94.1	5.9	0	0	0
高校	1	男	27.9	34.8	75.0	5.0	15.0	5.0	0
		女	41.7		85.7	7.2	7.1	0	0
	2	男	48.3	57.6	57.6	12.1	6.1	21.2	3.0
		女	66.2		60.0	14.0	20.0	6.0	0

表4　1年間に「欠課」した生徒数とその理由

単位：%

学年・性別			欠課した生徒		理由				
					けが・病気・気分悪	授業がつまらない	宿題がやってない	テストがある	その他
中学	1	男	12.5	16.2	100.0	0	0	2.2	0
		女	20.0		100.0	0	0	0	0
	2	男	40.0	48.8	88.9	5.6	0	0	5.5
		女	62.5		100.0	0	0	0	0
高校	1	男	37.8	40.2	76.5	23.5	0	0	0
		女	47.8		78.8	9.1	0	0	6.1
	2	男	53.6	55.7	40.1	24.4	0	2	31.1
		女	57.6		64.3	23.8	3.0	0	11.9

以上のように，四つの事項から生徒の実態をまとめたが，集約作業の過程で，表の数値には示され得ない特筆すべき点をも付加してみた。

ところで，中・高校生にとって，今やアクセサリー的性格を有するまでに普及した腕時計が容易に入手さ

れていても，生徒が所持する時計の便益性を規律ある生活や時間を厳守する生活に十分いかしているとは思われない。そこで，学校生活の中で定められている時刻・時間がなぜ守られないのか，その主な理由は何かを問うてみると，**表5**ような結果が得られた。

表5　定時刻の守られない理由　　単位：％

中学	1・男	怠け心62.5　寝ぼう37.5
	1・女	怠け心61.5　寝ぼう38.5
	2・男	寝ぼう72.7　気のゆるみ27.3
	2・女	気のゆるみ33.3　寝ぼう16.7　交通事情50.0
高校	1・男	だらしなさ35.0寝ぼう35.0怠惰25.0交通5.0
	1・女	寝ぼう33.4　病気33.3　怠惰22.2　交通11.1
	2・男	寝ぼう46.2　怠惰38.5　病気15.3
	2・女	寝ぼう50.0　怠惰30.0　病気20.0

次に，生徒自身が，時刻・時間を守るためにはどのように心がけたらよいか，具体的に書かせたところ，**表6**に示すような結果が得られた。

表6　定時刻を守るための心がけ　　単位：％

中学	1・男	自覚する71.4　早寝早起28.6
	1・女	自覚する54.8　早寝早起45.2
	2・男	けじめをつける52.9　早起47.1
	2・女	けじめをつける75.0　早起25.0
高校	1・男	自覚する83.3　早起16.7
	1・女	自覚する60.9　早起26.1　健康になる13.0
	2・男	早寝早起52.9　自覚する47.1
	2・女	自覚する52.9　早寝早起47.1

〔4〕忘れ物・提出物について

酒井為久　　田内公望

生徒が忘れ物や提出物について，どのような意識をしているかを調べることにした。アンケートは，中3・高3がともに卒業後の3月に行った。各項目について％で表した。中学は1・2年と学年別，高校については全体とした。又中学全体と高校全体の比較，中高全体についても表してみた。

アンケートの実施中，生徒からの質問もいくつかあり（質問の理解の仕方の違い等），それに対しては，深く考えず単に思ったことを素直に答えるよう指示した。生徒の意識の中には，ある程度のズレがあったと思う。これはこれからの課題にしなければならない。

1の結果から見ると，忘れ物は高学年になるにつれて増している。そしてアの毎日のように忘れるという生徒は，中1のみゼロだが，全体では5％近くもいる。これは，1人1人の生徒を把握し，個人的な指導を行うべきだと思われる。

2について，理由としていくつか出ているが，不注意（うっかり）がほとんどであった。その他，朝おきるのが遅い。その上時間割を朝行うなどの理由があげられた。忘れ物をする原因について，これだけはっきりとわかっているのだから，ゆっくりと行動する時間を作り出す，時間割の変更を見る，あるいはメモをとるなど，自分たちで気をつけることを期待したい。

3の質問について。提出物を忘れたからといって，あまり気にしない生徒が1割近くいることを，教師側は知っておくべきだと思われる。

5と9の質問に対しアと答えた生徒に対し，当然の事を実施しているのだが，勇気付ける先生側の指導が必要となってきている。

6の提出状況の理由について。中学生は，内容が不十分だからという理由が多く，続いて面倒だからやらない。それに対し高校生は，面倒だからという理由が1番多く，次が不十分と答えている。又，どのようにして提出しているかという工夫，あるいは理由について。中学生は，メモをとっているから忘れない。続いて成績に関係するから提出するという順である。それに対し高校生は，帰宅後すぐにやるから，授業中に終わらせてしまうからという意見が多かった。

8については，7割近くの生徒が，2～3日のうちに親の手元に渡ると答えている。しかし返事が必要でない場合は，なかなか渡らないようである。又，気が向いた時しか渡さない，という解答が1割近くあり，家庭との協調で本当の教育が成立するとすれば，これでは片腕飛行の教育でしかない。

9について言えることは，6割強の生徒が連絡事項を軽視しているように思われる。その理由として10で大勢が答えたのは，人と話しているから聞いていない，あるいはボーッとしているからなどである。この2点をいかに徹底するかによって忘れ物を防ぐ事が出来るのではないだろうか。

全体として，忘れ物，提出物不提出が予想以上に多い。その理由として①うっかり，②内容不十分が多かっ